

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」/
「地域における歴史文化研究拠点の構築」ユニット活動成果報告集

略縁起への招待

人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

久野俊彦・小池淳一 著

はじめに

地域における歴史や文化を考えようとするときに、神社や寺院はその存在だけでも大きな手がかりとなる。さらに、寺社には長い年月にわたって蓄積してきた宝物や文字資料が集まっている場合もあり、寺社にまつわる伝承が残されている場合もある。

略縁起は、寺社やその宝物、遺跡などに関する簡略な文字資料であるが、そこには前近代における宗教や信仰、歴史に関する貴重な情報が表現されている。本書は、そうした略縁起の資料性を探っていくみちびきとなるよう、いくつかの視点から、その特徴や特色を紹介し、利用の可能性を広げようとする意図のもとに編集したものである。

本書を糸口に、略縁起という資料群に関心を持っていただき、さまざまな立場から活用していただけることを期待している。

略縁起への招待

はじめに

- | | | |
|---|---------------------|----|
| I | 略縁起へのしざない | 6 |
| 1 | 略縁起とは | 6 |
| 2 | 略縁起の諸相 | 8 |
| 3 | 昔話・伝説と略縁起―「肉附面」を中心に | 12 |
| 4 | 関東地方の略縁起 | 16 |
| 5 | 有名寺社をめぐる略縁起―金閣の場合 | 20 |
| 6 | 略縁起と信仰の展開―善光寺の場合 | 23 |
| | ◎コラム 中野猛略縁起コレクション | 26 |
| 7 | 旅と略縁起―米沢藩士の伊勢みやげ | 27 |
| 8 | 略縁起と地域の歴史文化 | 31 |

II 『諸国縁起由来記』（歴博略縁起コレクション）の世界

- 1 国立歴史民俗博物館蔵『諸国縁起由来記』
- 2 寺社参詣と名所記
- 3 一枚刷りの名所記と略縁起
- 4 開帳と略縁起
- 5 霊跡寺院と略縁起
- 6 略縁起の刊行意図
- 7 流動するマスメディアとしての略縁起
略縁起に関するおもな参考文献

おわりに

著者紹介

I 略縁起のつねなき

I-1 略縁起とは

私たちが奈良・京都の観光で寺社を訪れて拝観料を納めると、寺社の案内パンフレットを授かることが多い。修学旅行やバスでの巡拝旅行のように一度の旅でいくつもの寺社を訪れると、案内パンフレットがたまっていく。これらは消耗品ではあるが、得がたい記念品でもあるので、京都・奈良などと方面別に袋に入れたり、ファイリングや製本したりして保存しておく人も多い。いくつか集まると、さらに多くの寺社のものも得たいと思い、寺社を訪れては必ずこれを求めて収集する人もいる。江戸時代の略縁起とは、こういった現在の寺社案内パンフレットのことであり、寺社が刊行した一枚ものや、数丁綴じのうすい冊子の刷り物である。

江戸時代にも、やはりこれを求めて収集し、整理して保存しておくという収集家が少なからずいた。収集家は、略縁起を十数冊ずつ綴じて「略縁起集」として保存した。収集家名が明らかなものでは、江戸の国学者の黒川春村（一七九九～一八六七）・黒川真頼（一八二九～一九〇六）が収集した略縁起集がある。師と養嗣子の彼らは、諸国を巡って一七五種の略縁起を収集し、『寺社縁起集』と題して二十一冊に合冊した（日本大学総合学術情報センター蔵黒川文庫所収）。こうして集められた略縁起は、現在確認されているもので三千点以上あり、今後の調査と目録化の作業によって、さらに多くの略縁起の存在が知られるだろう。江戸時代にいかに多くの寺社で略

縁起が板行され、大量に頒布されていたかがわかる。

明治時代以降も略縁起は活字本として刊行され、近世の略縁起とともに集められていることがある。現在の寺社案内書にも略縁起と称しているものがあり、中には江戸時代の略縁起を翻刻したり現代語訳したりして刊行したものもある。江戸時代の略縁起の伝統は、現在の寺社案内書に引き継がれている。

(久野俊彦)

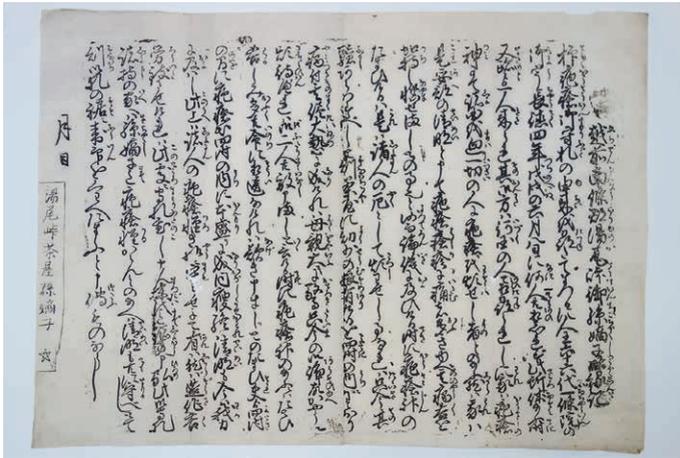
I-2 略縁起の諸相

略縁起は、寺社の縁起の要点を簡略に紹介するほか、関連する行事や宝物などの解説が加えられている場合もある。寺社の仏像や宝物を公開する開帳などと連動して製作される場合も少なくなかったと思われる。その形態は一枚刷りのものから数丁の冊子状のものなど形式はさまざまであるが、総じて簡便なよそおいで、読み捨てられる場合も少なくなかったと推察される。

略縁起は、江戸時代の人びとの過去に対する考え方（歴史認識）や神仏とのつながり（信仰）を考える上で興味深い素材を提供してくれる面を持っている。特に広い享受層を想定し、簡明な表現で寺社とそこで祀られている神仏の利益を説き、帰依を促す内容を持っていたことはその特徴である。時にそれらは今日でいうところの観光案内の役割をはたす場合もあったと思われる。また絵をともしなうものもあり、神仏や土地の歴史へのイメージをふくらませる役割もはたしてきただといえる。

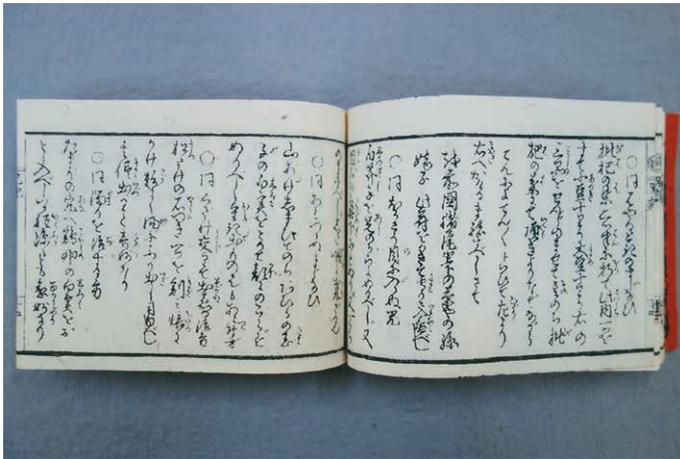
略縁起を手に入れた人びとは、それを手かがりに宗教的な刺激を受け、現実の生活のなかから信心・信仰への回路を開いていった場合もあったであろう。寺社や祭神、本尊をめぐる物語に心をおどらせたり、関連する事績や遺物を通して土地にねぎした歴史への意識をはぐくむ場合もあったに違いない。略縁起はそうした日常生活世界と宗教的な感興、文芸的な関心、歴史的な認識との間を結ぶメディアでもあった。

（小池淳一）



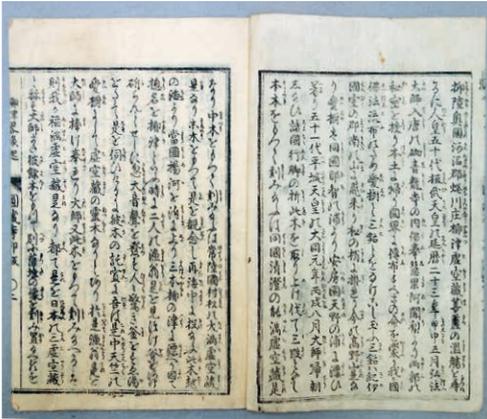
「越前南條郡湯尾峠御孫赤子略縁起」 刊年不詳 国立歴史民俗博物館蔵

湯尾峠の茶屋で出されていた疱瘡に効く護符の由来を説く略縁起。安倍晴明と疱瘡神とのかわり方を述べている。左端に護符の墨書がある。

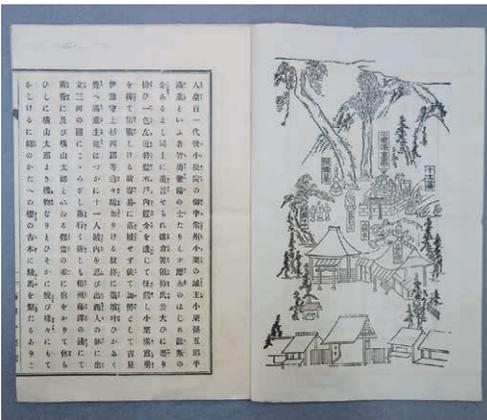


(参考)「新撰呪詛調法記大全」 天保13 (1842) 年刊 個人蔵

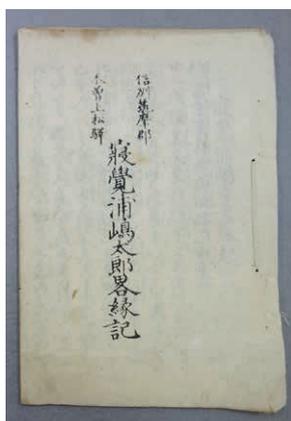
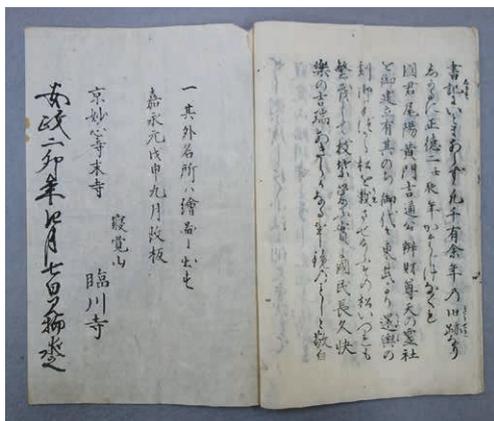
「疱瘡はやる時のまじない」として「越前国猪尾之峠之茶屋之孫赤子此符を守りにすべし」とされている。伝聞が重ねられて訛ったものか。



「福満虚空蔵大菩薩略縁起 完」天保5（1834）年刊 中野コレクション
 福島県会津の柳津の円蔵寺、虚空蔵菩薩の略縁起。弘法大師が刻んだものと述べられている。



「小栗畧縁起」刊年不詳（近代）中野コレクション
 相模藤沢の長照院が刊行した略縁起。冒頭に境内の木版の絵図を掲げるが、本文は活字である。近世の略縁起が近代になっても広く迎えられたことがうかがえる。



「信州筑摩郡木曾上松野寢覚浦嶋太郎略縁起」 嘉永元（1848）年刊 中野コレクション
 信州木曾の臨川寺が刊行した略縁起。寢覚の床と結びついた浦嶋伝説を記している。
 「安政二卯年四月七日見物求之」と記されており、入手の経緯がわかる。



姥捨山縁記 刊年不詳 中野コレクション

信州姥捨山の略縁起。表紙に上掲の「浦嶋太郎略縁起」と同筆で「安政二卯年四月十日見物求之」と記され、おそらく同一人物が信州の旅の途次に入手したものと思われる。

1-3 昔話・伝説と略縁起―「肉附面」を中心に

略縁起には、それぞれの寺社やそれらが存在する地域の伝説が取り入れられる場合があった。また、略縁起となったことで、土地毎の説話が広く全国各地で知られるようになっていくことがあったことも見逃せない。略縁起という文字化のプロセスを経ることで、ひとつの地域の説話が広範な伝承となっていたことが想定できる。

ここでは越前国吉崎（現在、福井県あわら市）の寺院の略縁起をとりあげてみたい。この地域の複数の寺院には鬼の面が所蔵されており、それにまつわる「肉附面」の説話が伝えられていた。嫁姑の確執を中心とした説話が、真宗の教えと結びつき、近世には略縁起となったことで全国に知られるようになったのである。

数多くのよく似た内容の略縁起は、寺院の唱導の隆盛を示すとともに、この説話が人びとに人氣を博していたことを示している。

（小池淳一）



「嫁威肉附之面由来」 刊年不詳 国立歴史民俗博物館蔵

吉崎の西念寺が刊行した「肉附面」に関する略縁起。表紙には、「蓮如上人御わらじぬき旧跡」とあり、巻頭に鬼の面の絵が掲げられ、「はめばはめくらはぐくらへ 金剛の 他力の信は よもやはむまじ」という和歌が記されている。

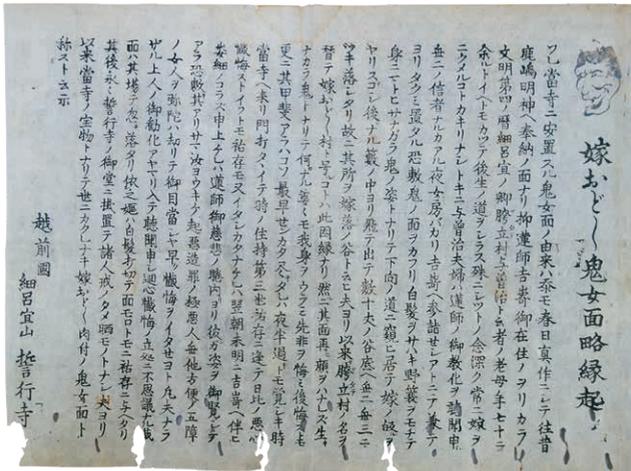


「嫁威肉附之面由来」 大正14 (1925) 年刊、個人蔵

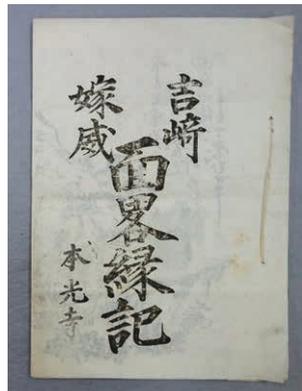
西念寺の活字版。冒頭に蓮如上人が吉崎に着いた場面のを掲げ、真宗との結びつきを印象深くしている。また巻末に地図を付して参詣の便も図っている。近代に入っても、「肉附面」の説話が唱導に大きな役割をはたしていたことがうかがえる。



「吉崎嫁威面略縁起」 刊年不詳 中野コレクション
 吉崎の願慶寺が刊行した「肉附面」に関する略縁起。巻頭には「春日作」と記し、恐ろしげな面の絵を掲げる。

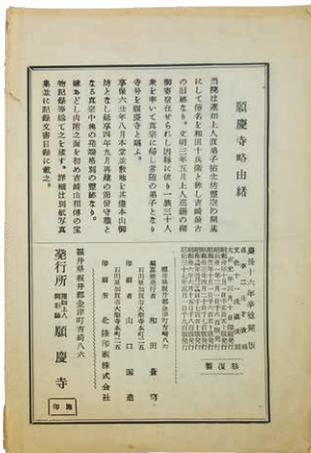


「嫁おどし鬼女面略縁起」 刊年不詳 中野コレクション
 同じ「肉附面」の略縁起であるが、こちらは一枚にまとめられている。



「嫁威肉附面略縁起」 刊年不詳 中野コレクション

吉崎の本光寺が刊行した、ほぼ同内容の「肉附面」に関する略縁起。巻頭の和歌は「喰まば喰め食らわば食らへ金剛の回向の信はよもや食むまし」とやや異なっている。



「蓮如上人真宗再興之旧跡／真正嫁威肉附面縁起」 昭和37（1962）年 個人蔵

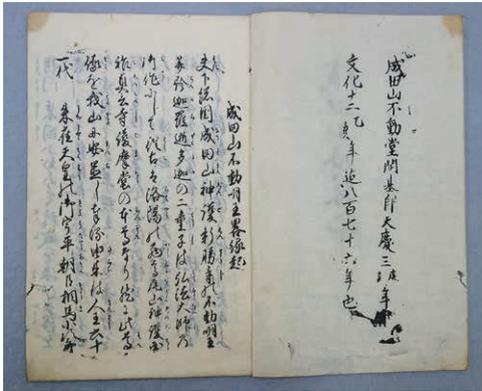
願慶寺が慶長16年開版をうたい、昭和37年で、1900版とする略縁起。同寺の宝物などに関する記載もあり、観光パンフレットとしての性格も感じられる。

I-4 関東地方の略縁起

わたしたちは寺社に何を求めて参拝するのだろうか。神や仏に祈りをささげ、願いを聞き届けてもらおうとする一方で、実際に建物をながめ、境内のなかを歩くことで、そこに積み重ねられた歴史や文化を身近に感じるのではないだろうか。

略縁起には寺社にまつわる歴史や説話がわかりやすく記されている。かつて人びとは、それを手がかりに、神仏を拝み、土地の歴史に思いをはせたのだろう。それは現代の観光にもつながるものといえよう。

関東地方に限ってもさまざまな由緒や縁起を持つ寺社があり、略縁起が数多く刊行されている。それらのなかにはあらためて縁起が版行されるに至った事情がうかがえるものもあり、寺社をめぐる「歴史」が再編されていった様相を知ることができる場合が少なくない。(小池淳一)



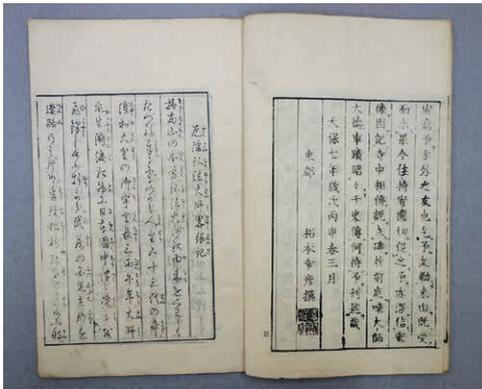
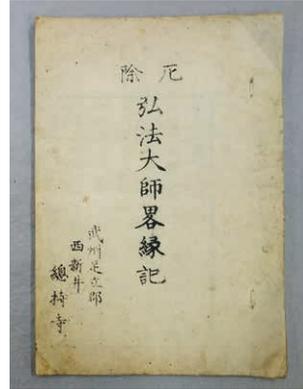
「成田山略縁起」 文化12 (1815) 年 中野コレクション

千葉県成田市の成田山新勝寺の略縁起。巻頭で開基から出版の年に至るまで876年経っていることを示している。寺社の歴史を身近に感じさせる工夫だろうか。



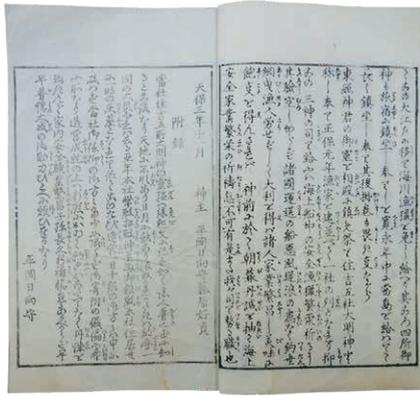
「上総芝山仁王神靈験録」 嘉永5 (1852) 年 中野コレクション

千葉県芝山町観音経寺の芝山仁王尊の略縁起。挿絵を多く入れて親しみやすく、わかりやすい内容となっている。



「厄除弘法大師畧縁記」 刊年不詳 中野コレクション

東京都足立区の西新井大師の略縁起。天保7（1836）年の「西新井総持寺碑記」（漢文）と成立年不詳の「厄除弘法大師略縁起」（漢字仮名交じり文）とを合冊している。



「大江戸佃島住吉神社略縁起」天保3（1832）年 国立歴史民俗博物館蔵
東京佃島の住吉神社の略縁起。刊行される3年前に灰燼に帰した社殿の再建を訴える附録がつけられている。



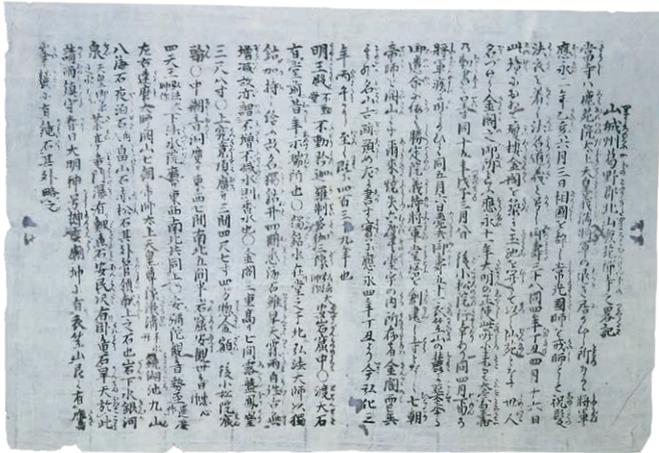
「江都湯嶋天満宮略縁起」
弘化5（1848）年 国立歴史民俗博物館蔵
東京の湯島天神の略縁起。祭られている菅原道真の伝記が附録として載せられている。

1-5 有名寺社をめぐる略縁起―金閣の場合

江戸時代には著名な寺社の由来や宝物が、略縁起のかたちで広くもてはやされるようになったことにも注目すべきである。また、貴族や武家が創建したり、再建してきた寺社に人びとの関心が集まるようになっていった。京都の北山にある鹿苑寺は、今日、俗に金閣と呼ばれる舍利殿が有名であるが、すでに近世に金閣の略縁起が出されていて、多くの人びとの興味を集めていたことがうかがえる。観光の名所として前近代からの長い伝統があるといえよう。

明治以降には絵はがきなども多く作られ、金閣やその他の建物とその歴史的な背景が人びとにとって引き続き魅力的であったことがうかがえる。略縁起は今日という観光とつながるメディアとしてもとどらせることができる。

(小池淳一)



「山城州葛野郡北山鹿苑禅寺之略記」 弘化3（1846）年刊 国立歴史民俗博物館蔵
 鹿苑寺（金閣）の略縁起。足利義満によって建立された経緯と安置されている諸仏の由来が記されている。



「北山鹿苑寺金閣之図」 刊年不詳 国立歴史民俗博物館蔵
 金閣を中心に鹿苑寺境内の様子が描かれている。



絵葉書（金閣寺）近代 国立歴史民俗博物館蔵

近代に入っても観光の名所として人気があったことが多くの絵葉書からうかがえる。「京都金閣寺（特別保護建造物）The Kinkakuji Kyoto」と説明されている。



絵葉書（金閣寺）近代 国立歴史民俗博物館蔵

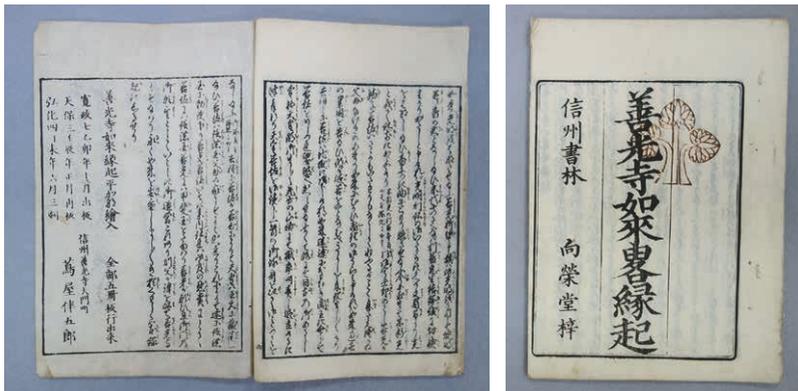
「京都金閣寺 臨濟宗にして鹿苑寺と号す夢窓国師の開基なり当時は足利義満の山荘にして後寺院となる三層の閣を即ち金閣と云ふ」と説明されている。

I-6 略縁起と信仰の展開―善光寺の場合

長野市の善光寺は、独特の一光三尊様式の阿弥陀如来を本尊とする古代からの寺院で、庶民信仰の舞台としてもよく知られている。「善光寺縁起」は、遠くインドから伝来したとされる本尊にまつわるさまざまな宗教的な史実や説話などを集成したもので、古代にはすでにその原型が存在し、中世に形を整え、近世になると版本や略縁起としてひろく知られるようになっていった。

善光寺は変遷を重ねたその歴史と信仰のひろがりから、現在では全国各地に同じ名を持つ寺院が百以上存在している。長野市の善光寺ばかりでなく、各地の善光寺でも近世期から略縁起が刊行されてきて、それらからは、それぞれの土地における善光寺信仰のすがたを知ることができる。

(小池淳一)



「善光寺如来略縁起」 刊年不詳 中野コレクション

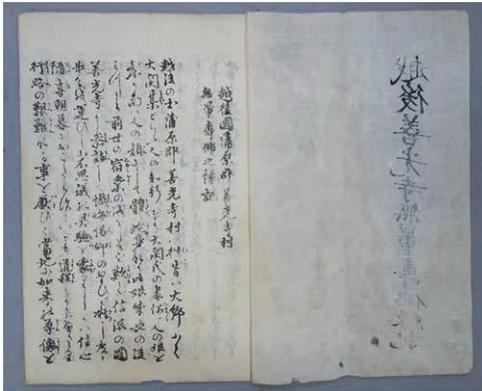
巻末に「善光寺如来縁起平かな絵入」の刊行が記されている。その内容見本のような役割もはたしたのか。



「善光寺如来略縁起」 明治12（1879）年刊 中野コレクション
近代に入って天皇も訪れたことを述べる絵入りの略縁起。

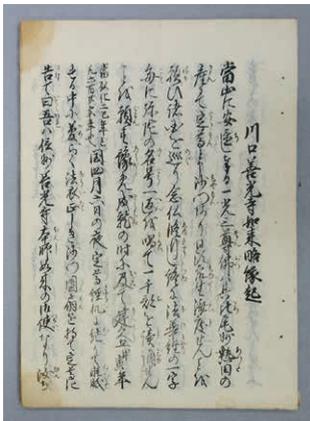


「信州伊那郡元善光寺如来略縁起」 刊年不詳 中野コレクション
長野に落ち着くまでの途中で一時鎮座した土地にも善光寺如来を勧請し、寺を建てたことを述べた略縁起。



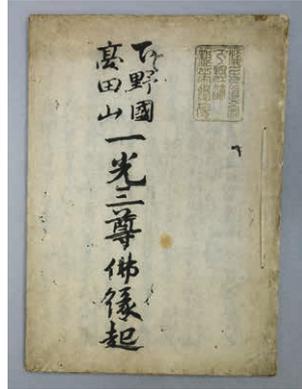
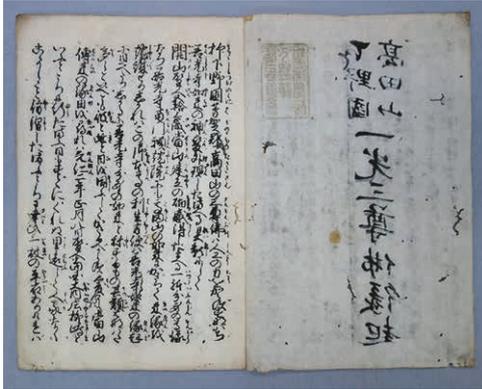
「越後善光寺無量寿仏縁記」 享保13 (1728) 年刊 中野コレクション

越後(新潟県)蒲原郡善光寺村に善光寺如来をかたどった仏が安置されたことを述べる略縁起。善光寺信仰の隆盛と伝播をうかがうことができる。



「川口善光寺如来略縁起」
弘化2 (1845) 年刊 中野コレクション

関東の新善光寺として広く知られた平等山阿弥陀院善光寺の略縁起。



「下野国高田山一光三尊仏縁起」 刊年不詳 中野コレクション

真宗寺院として著名な専修寺に善光寺様式の一光三尊仏が祀られていることを説く略縁起。

◎コラム 中野猛略縁起コレクション◎

中野猛氏（一九三三年生まれ）は東京教育大学大学院を修了したのち、文部省図書館職員養成所を修了し、国立大学の図書館勤務を経て、都留文科大学文学部に着任、長年同大学で教鞭をとった。一九七六年の宮内庁書陵部への内地留学の際に、略縁起集に出会い、その豊かな資料性に着目し、調査研究を開始した。その後、各地の図書館に所蔵されている略縁起類を精力的に調査し、数多くの目録を作成して、研究の基盤を固める作業を長年にわたっておこなった。それとともに説話文学研究を中心とした後進の育成にも尽力した。同氏はそうした研究の過程で略縁起そのものの収集にも取り組み、総計六百点を超える大量のコレクションを作り上げるに至った。その概要は『略縁起集成』一〜六（勉誠社）でうかがうことができる。その一部は久野俊彦氏の協力のもと、国立歴史民俗博物館で、二〇一八年四月から一〇月にかけて行われた「お化け暦と略縁起―生活のなかの文字文化―」で展示された。（小池淳一）

I-7 旅と略縁起―米沢藩士の伊勢みやげ

寺社参詣で略縁起手に入れて故郷に持ち帰ったことが具体的にわかる資料が、米沢藩士だった吉田家に伝わる略縁起である。米沢藩御馬廻役の吉田綱富（一七五六―一八四九）の息子、吉田丈助（一七八八―一八六三）は、藩に伊勢参宮を願い出て、文政三年二月一日に五人で出かけた。同行したのは吉田丈助（三十三歳）・佐藤孫次（三十二歳）・長谷川与惣次（二十四歳）・野本美保蔵（二十四歳）・坂根秀蔵（二十二歳）の五人の藩士であった（吉田綱富『綱富一代記』米沢市立図書館蔵）。伊勢参宮の後には奈良・京都の寺社めぐりをして、三月に米沢に戻った。吉田丈助がみやげとして持ち帰った略縁起を見てみよう。

大和国の多武峰権現（現在、奈良県桜井市談山神社）の『多武峰山略縁記』（一枚刷り）には、「文政三年二月廿九日多峰於 吉田丈助」と書き込みがある。奈良（平城京）の寺社名所案内記である『改正絵入 南都名所記』（二十丁冊子〈四十ページ〉文化二年刊）には、「文政三年中伊勢参宮之節求之 吉田丈助」と書き込みがある。『東山 西山 京名所独案内』（四丁冊子、刊本）には、「文政三年中 伊世（勢）参宮之節求之 吉田丈助」と書き込みがある。また、中山道の沿道にあり源義朝伝説を説く美濃国青墓宿円願寺（現在、岐阜県大垣市青墓、円願寺跡よし竹庵）の『略縁起 并 古跡由来』三丁冊子、刊本）には、「皆様の御らんの為に求めけり、恥しなから御らんくだされ、文政三ヶ年三月伊勢参宮之節求之、吉田丈助」「文政三年三月 吉田丈助」とある。さらに、東海道の近い江の島（現在、神奈川県藤沢市）の名所図の『江之島金龜山三宮

細見之図』（一枚刷り）には、「文政三年中 伊勢参宮之節求之 吉田丈助」と書き込みがある。伊勢への往路と復路を中山道と東海道のどちらかに通り分けたい。

これらによって、伊勢参宮のついでに奈良京都の名所や寺社を巡拝し、その途上の名所にも訪れて名所記や略縁起をみやげとして求めて持ち帰ったことがわかる。それを米沢の人びとに見せて、旅の話をしたり回覧したりしたことがうかがえる。この伊勢参宮は、米沢の人びとの代わりに参詣してくるといって代参であり、相応の餞別ももらったのだろう。「御らんの為」のみやげとは、そういう人びとに報いて、旅の楽しみを分かち合うためのものであった。

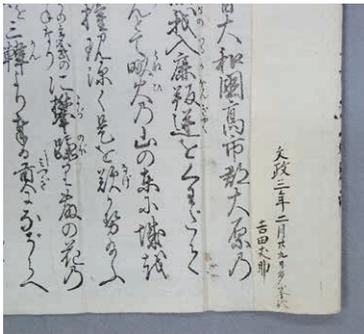
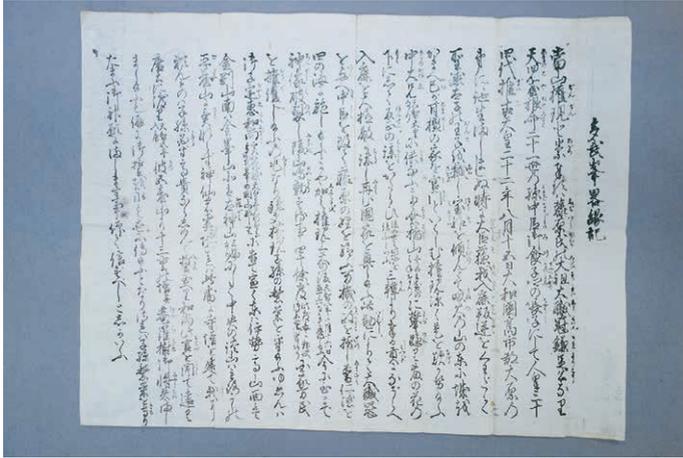
（久野俊彦）



「略縁起并古跡由来」（美濃国不破郡青墓宿弘誓山圓願寺版）

個人蔵、吉田家旧蔵資料

表紙に署名とともに「皆様の御らんの為に求めけり 恥しなから御らんください 文政三ヶ年三月伊勢参宮之節求之」と記されている。



「多武峰略縁起」
個人蔵、吉田家旧蔵資料

端裏に「文政三年二月廿九日多峯於
吉田丈助」と記されている。



「東山西山京名所独案内」
文化年間（1804～1818）刊
個人蔵、吉田家旧蔵資料

表紙にちいさく「文化新板」と刷られてあり、
当時の最新の京都のガイドブックであったことが
うかがえる。



「江之島金亀山三宮細見之図」 刊年不詳 個人蔵、吉田家旧蔵資料

江ノ島の伽藍配置を示すもの。多くの人が手にしたらしく、全体が毛羽立っている。
端裏に文政三年の旅の途次に入手したことが記されている。

I-8 略縁起と地域の歴史文化

近世の略縁起は、寺社にまつわる歴史を身近に感じたいという人びとの要望に応えたものであった。これらの略縁起は過去、すなわち歴史へと人びとをいざなったのである。

こうした略縁起の刊行は、地域に根ざした伝説が、地域をこえて広く知られるきっかけともなった。ここでとりあげた資料はちいさなものだが、くらしのなかの伝承と文字文化とが互いに補いあい、重なり合って展開してきたことを改めて気づかせてくれる。

また特定の寺社に対する興味の変遷や縁起や由来が出版文化にどのように表現されたか、という側面からの検討も可能であろう。略縁起とその周辺の資料は、文化の歴史や表出のありようについて考える手がかりでもある。

さらに、民俗や伝承は、このように生活のなかの文字文化と深くかわりあいながら発展したことも意識すべきだろう。文字文化と伝承・民俗との複雑な関係を解きほぐす、ちいさいが重要な手がかりをここに見出すことができるのである。

(小池淳一)

Ⅱ 『諸国縁起由来記』(歴博略縁起コレクション)の世界

Ⅱ-1 国立歴史民俗博物館蔵『諸国縁起由来記』

国立歴史民俗博物館には『諸国縁起由来記』と題する一一〇点の略縁起(名所図・神仏図を含む)のコレクションがある。このコレクションは収集家によるものではなく、近代になって古書店などを経て一括されたものである。江戸時代の木版刷り物から近代の活字印刷のものまである。寺社の地域は、東北・北陸・関東・東海・近畿・中国・四国地方にわたっているが、東国・北陸と近畿が多い。近畿では、鹿苑寺金閣・石山寺・三井寺・法隆寺・長谷寺などよく知られた寺院の略縁起がある。地域別に配列してみると次のようになる。

◇諸国縁起由来記』(請求記号H-779 ◎は西国三十三観音 ●は親鸞・蓮如旧跡 ★は合綴跡)

◇陸奥

- ・奥州金華山略縁起 (H-779-06) 刊本 黄金山神社 一枚)
- ・奥州金華山略縁起 (H-779-20) 刊本 黄金山神社 一枚)
- ・陸奥名所 (H-779-23) 刊本 一枚)
- ・陸奥国八葉寺縁記 (H-779-37) 刊本 文政五年 八葉寺 二丁一冊 縦折跡)
- ・奥州柳津福満虚空蔵大菩薩略縁起 (H-779-50) 刊本 天保五年 円蔵寺 六丁一冊 横折跡)

- ・奥州岩城御出張御坊大泉寺略縁起 (H-779-62-25) 刊本 大泉寺 継紙一枚 現状は二枚)
- ・抑斯御真影ハ聖人関東御経廻ノ砌南部 (H-779-62-26)〈本誓寺略縁起〉刊本 本誓寺 一枚 首題なし 蓮池奇異の図あり)
- ◇出羽
 - ・羽州山寺立石寺縁記 (H-779-54) 刊本 文化五年 立石寺 八丁一冊 縦折跡 雁皮紙)
- ◇武蔵
 - ・亀戸神社卯杖卯槌廻由来 (H-779-22) 刊本 亀戸天神社 一枚 首題「卯杖 剛杖 穀杖 卯槌 廻由来」)
 - ・坂東報恩寺什宝略記 (H-779-38) 刊本 明治期 報恩寺 七丁一冊 二十四輩第一番 縦折跡 ●)
 - ・武州東運寺鉦冠薬師瑠璃光如来略縁起 (H-779-40) 刊本 安政五年 東運寺 十一丁一冊 縦折跡)
 - ・武州幸手風変不動堂再建立勸進帳 (H-779-61) 刊本 東大寺役院 七丁一冊 外題「西行法師旧跡 風変不動堂再建立勸進帳」西行法師見返りの松の図あり)
 - ・不動岡村不動明王略縁起 (H-779-59) 刊本 総願寺 五丁一冊 識語「明治二十年第四月 武蔵国南埼玉郡青毛村 大越兵右衛門所持」)
 - ・頭痛消滅枕守来由記 (H-779-62-07) 刊本 元治二年 本松寺 江戸 三丁一冊 刻記「元治二乙丑年五月八日より日数三十日之間自坊ニおゐて開帳仕候間御参詣可被下候以上」)

・大江戸佃島住吉神社略縁起 (H:779-62-08) 刊本 天保三年 住吉神社 三丁一冊)

◇常陸

・常陸国新治郡板敷山正行寺祖師上人大蛇濟度縁起 (H:779-52) 刊本 正行寺 六丁一冊 縦折

跡 ●)

◇下総

・正泉寺女人成仏血盆経縁起 (H:779-24) 刊本 天保九年 正泉寺 七丁一冊)

・下総国飯沼大生寺御神酒天神他略縁起 (H:779-51) 刊本 大生寺 五丁一冊 ★)

・下総国関宿中戸村常敬寺縁記略 (H:779-42) 刊本 常敬寺 一枚 ★ ●)

・下総国葛飾郡上花輪村長命寺聖徳太子略縁起 (H:779-49) 刊本 長命寺 二十四輩第七番 五

丁一冊 ★ ●)

◇相模

・万福寺蔵板義経腰越状 (H:779-27) 刊本 文政三年 瑠璃峯満福寺 六丁一冊)

・相州藤沢小栗略縁起 (H:779-60) 刊本 清浄光寺長生院 七丁一冊 識語「干時明治廿年一月

再緘 武蔵国南埼玉郡青毛村 三十三番地居住 大越兵右エ門求之」)

◇越後

・越後国蒲原郡如意山乙宝寺略縁起 (H:779-55) 刊本 乙宝寺 四丁一冊)

・乙山略縁起 (H:779-62-12) 刊本 乙宝寺 三丁一冊)

・越後二十九番蒲原二十七番聖籠山観世音略縁起 (H:779-62-10) 刊本 安政二年 観音寺 二

丁 現状は二紙)

- ・越後の国五智如来御利生 (H:779-62-28) 印刷 国分寺 一枚 青刷り (奇瑞の図あり)
- ・越後国古志浦野積邑海雲山岩坂弘智法印傳記 (H:779-62-29) 刊本 天保六年 西生寺 一枚 入定仏)
- ・越後旭邑観世音略縁記 (H:779-62-30) 刊本 承応二年 普談寺 観音堂 一枚)
- ・越後国国上山縁起之略 (H:779-62-32) 刊本 国上寺 一枚)
- ・畠山六郎殿略記 (H:779-H:779-62-37) 刊本 五社大権現〈蒲原神社〉一枚)
- ・越後高田御坊性宗寺略縁記 (H:779-15) 刊本 性宗寺 一枚 ●)
- ・越後国蒲原郡田上邑了玄寺繫樞略縁記 (H:779-16) 刊本 了玄寺 一枚 ●、繫ぎ樞霊跡)
- ・越後国蒲原郡酒屋町西養寺所領田上村繫樞略縁記 (H:779-62-21) 刊本 了玄寺 一枚 ●、繫ぎ樞霊跡)
- ・親鸞上人繫樞御旧跡 (図) (H:779-62-27) 刊本 了玄寺 一枚 樞樹図あり ●、繫ぎ樞霊跡)
- ・越後外浜村飛龍山大雲寺略縁起 (H:779-41) 刊本 大雲寺 一枚 ★ ●)
- ・越後国頸城郡扇谷洪々宿略縁起 (H:779-48) 刊本 六丁 六丁一冊 ★ ●)
- ・祖師聖人御杖倒枝竹略縁記 (H:779-62-18) 刊本 浄光寺 一枚 ●、逆さ竹霊跡)
- ・越後国頸城郡 小丸山 親鸞聖人御旧跡并名号略縁記 (H:779-62-20) 印刷 国府別院 越後一枚 青インク ●)
- ・越後国蒲原郡北山邑渡邊院誓岸寺略縁記 (H:779-62-23) 刊本 誓岸寺 一枚 ●)

- ・伊夜日子靈宝親鸞聖人御木像縁起 (H-779-62-24) 刊本 弥彦神社 一枚 文中に明和二年とあり ●)
- ・越後州蒲原郡保田の郷孝順寺靈宝旧跡略縁起 (H-779-62-31) 刊本 孝順寺 一枚 ●、三度栗(靈跡)
- ・焼酎旧跡略縁起 (H-779-62-34) 刊本 山王大権現(山王神社) 一枚 ●、焼き酎(靈跡)
- ・聖人御自作木像略縁記 (H-779-62-36) 刊本 五智竹之内 一枚 ●)
- ・祖師聖人鏡御影乃由来 (H-779-62-38) 刊本 称慶寺 一枚 ●)
- ・御宝物縁起 (H-779-62-41) 刊本 蒲原郡上黒瀬村 円山名左衛門 一枚 ●)
- ・越後高田仏光寺御房 聖人草庵御影 (H-779-62-附) 刊本 仏光寺御房 一枚 親鸞聖人配所の御影(図あり) ●)

◇越前

- ・越前南條郡湯尾峠御孫嫡子略縁起 (H-779-62-14) 刊本 孫嫡子神社 一枚 疱瘡除け札が墨書されている「湯尾峠茶屋孫杓子★ ニルヤ」)
- ・蓮如筆講中宛御文 (H-779-30) 刊本 明治十二年識語 吉崎御房 三丁一冊 ●)
- ・越前国敦賀郡山中光伝寺三方正面弥陀尊影縁記 (H-779-36) 刊本 元和二年 光伝寺 首題「有乳山什物 三方正面阿弥陀尊影縁記」 二丁一冊 ★ ●)
- ・嫁威肉附之面由来 (H-779-62-06) 刊本 西念寺 四丁一冊 ●)

◇信濃

- ・善光寺如来略縁起 (H-779-28 刊本 安政七年 善光寺 七丁一冊)
 - ・刈萱堂往生寺略縁起 (H-779-62-11 刊本 往生寺 四丁一冊 縦折跡 明治版か)
 - ・御嶽神社縁起略記 (H-779-62-46 刊本 小谷分喜編輯 明治十五年 御岳神社 十六丁一冊 木曾御嶽山之図あり 色刷り)
 - ・親鸞聖人御染筆笹子御名号縁起 (H-779-09 刊本 善光寺堂照坊 一枚 ●)
 - ・祖師聖人御真筆九字御名号略縁起 (H-779-62-39 刊本 平出村彦坂藤兵衛 一枚 ●)
- ◇遠江
- ・遠州小夜中山化鳥刃之雉子退治之由来 (H-779-34 刊本 明治十五年 久延寺 二丁一冊 縦折跡)
 - ・遠州小夜中山無間之鐘之由来 (H-779-35 刊本 明治十五年 久延寺 二丁一冊 縦折跡)
 - ・遠州小夜中山夜啼之石敵討之由来 (H-779-36 刊本 久延寺 二丁一冊 縦折跡)
 - ・星祭縁起 (H-779-62-47 刊本 応賀寺 三丁一冊 仮綴 縦折跡)
- ◇三河
- ・東観音寺縁起 (H-779-26 刊本 東観音寺 十三丁一冊 茶色表紙後補)
- ◇加賀
- ・俱利伽羅大龍不動明王略縁起 (H-779-62-09 刊本 長楽寺 三丁一冊)
 - ・吉田西町大聖寺役行者一千百五十年御遠忌 (H-779-62-16 刊本 大聖寺 一枚)
- ◇美濃

・長嶺村講中写御庚申縁記 (H:779-44 写本 文化六年 長嶺村講中 二十一丁一冊 青色表紙 識語「榎本蓬廬(花押)」)

・青墓宿古跡之由来 (H:779-62-33 刊本 青墓宿 一枚)

◇近江

・石山寺由来略縁起 (H:779-07 刊本 石山寺 一枚 ◎西国三十三観音)

・三井寺鐘由来 (H:779-13 刊本 園城寺 一枚 ◎西国三十三観音)

・近江国唐崎一ツ松之図 (H:779-02 刊本 文政十一年 一枚)

・日吉神社撰社唐崎社靈松略縁起 (H:779-19 刊本 明治期 日吉神社 一枚)

・錦織寺御門跡略縁起 (H:779-47 刊本 七丁 錦織寺 近江 七丁一冊 ★●)

◇山城

・鹿苑禪寺之略記 (H:779-11 刊本 鹿苑寺〈金閣〉 一枚 文中に弘化三年とあり)

・黒谷紫雲石略縁起 (H:779-21 刊本 西雲院 一枚)

・黒谷紫雲石略縁記 (H:779-62-40 刊本 西雲院 一枚)

・清涼寺釈迦如来栴檀端像記 (H:779-29 刊本 清涼寺 二十五丁一冊)

・山城月輪寺略縁起 (H:779-39 刊本 月輪寺 四丁一冊 縦折跡)

・京紫野大徳寺三天合形大黒尊縁記 (H:779-57 刊本 明治八年 大徳寺 一枚)

・泣不動明王略縁起 (H:779-62-01 版本 清浄華院 一枚 命替泣不動尊御影図あり)

・熊谷蓮生法師略縁起 (H:779-62-35 刊本 黒谷熊谷堂 一枚)

- ・山科郷蓮如上人御旧跡略縁起 (H-779-45) 刊本 山科別院 三丁一冊 ★ ●)
- ・北山御坊略縁起 (H-779-62-13) 刊本 北山御坊 一枚 ●)
- ・略縁起 (H-779-62-43) 刊本 親鸞聖人植髮尊像の由来 華頂山御堂 一枚 ●)
- ◇丹後
 - ・丹後喜禮渡文殊天橋立略縁起 (H-779-62-17) 版本 智恩寺 一枚)
- ◇大和
 - ・大和国長谷寺縁起 (H-779-53) 刊本 文化十四年 長谷寺 十五丁一冊 明治版インク ◎西国三十三観音)
 - ・多武峯略縁起 (H-779-05) 刊本 多武峰権現〈談山神社〉一枚)
 - ・吉野山子守宮略縁起 (H-779-08) 刊本 子守宮〈吉野水分神社〉一枚)
 - ・法隆寺略御縁由 (H-779-25) 刊本 天保十三年 法隆寺 十一丁一冊)
 - ・改正絵入南都名所記 (H-779-31) 刊本 万延二年 二十一丁一冊)
 - ・当麻寺奥院蔵板圓光大師行状和讃附奥院略縁記 (H-779-43) 刊本 外題「円光大師行状和讃附奥院略縁起」文化九年 当麻寺 十二丁一冊 縦折跡)
 - ・菅原天満宮略由 (H-779-62-05) 刊本 伏見堂喜光院 一枚)
- ◇河内
 - ・勅修円光大師御傳御法語の中々 (H-779-62-15) 刊本 運潮寺 一枚)
- ◇摂津

・撰州須磨寺靈宝附 (H-779-17) 刊本 嘉永三年 須磨寺 細長一枚)

◇紀伊

・西国第二番札所紀三井寺略縁起 (H-779-01) 刊本 紀三井寺 一枚 ◎西国三十三観音)

・紀州日高郡道成寺御建立略縁起 (H-779-04) 刊本 道成寺 一枚)

・和歌浦名所記 (H-779-18) 刊本 和歌浦 紀伊 一枚)

・紀州九度山邑伽羅陀山善名稱院地藏尊略縁起 (H-779-62-45) 刊本 文化七年 善名稱院 紀

伊 一枚 境内図あり)

◇播磨

・尾上のかね由来 (H-779-10) 刊本 尾上神社 一枚)

・高砂相生松略記 (H-779-12) 刊本 高砂社 一枚)

・相生高砂社靈松之図 (H-779-14) 刊本 高砂社 一枚)

・高砂社相生靈松之図 (H-779-62-02) 刊本 高砂社 一枚 靈松の図あり 識語「慶應二丙寅

□ 三日見物重^国□」)

・高砂社相生松略記 (H-779-62-03) 刊本 高砂社 一枚 識語「慶応二丙寅 菊之三日見物重

国」)

・光明真言袖鏡 (H-779-33) 刊本 天保十一年 深志野村良教 六丁一冊 縦折跡 識語「旧宮

脇村本主 平石長兵衛」)

・播磨国石宝殿略記 (H-779-62-44) 刊本 生石社 一枚)

◇伊勢

- ・勢州津国府阿弥陀如来略縁記 (H-779-56 大宝院 六丁一冊)
- ・地藏菩薩之化身円戒国師安心法語円戒國師安之法語 (H-779-62-19 写本 一枚)
- ・西国三十三ヶ所順禮の由来 (H-779-62-22 活字印刷 惠音院 一枚)
- ・当山御本尊の由来 (H-779-62-42 刊本 千福寺 一枚)

◇讃岐

- ・讃岐国海岸寺護摩堂再興募縁起 (H-779-32 活字印刷 外題「護摩堂再募縁疏」 明治十四年 海岸寺 六丁一冊)

◇土佐

- ・西国三十三所靈場順禮中興開山花山院御廟所由来 (H-779-62-04 刊本 安政五年 千光院 花山院廟 花山神社 一枚 里程が記されている)

◇出雲

- ・日御碕大神宮龍蛇神徳略記 (H-779-03 刊本 後欠 日御碕神社 一枚)

◇周防

- ・周州峨眉山普賢菩薩縁起略記 (H-779-58 刊本 普賢寺 三丁一冊 縦横折跡)

これらの略縁起を具体例にしなから、略縁起の成り立ちとその諸相を見ていこう。

II-2 寺社参詣と名所記

寺社の縁起は寺社の成り立ちや靈験の証しを記したもので、寺社の信仰を支える大切な書物である。初期の寺社縁起は、平安時代の「伽藍縁起并流紀資財帳」である。これは寺院縁起と宝物目録を合わせたものである。やがて縁起は寺社の物語となつてゆき、物語絵巻と融合して絵画化され、縁起絵が成立した。中世には多くの寺社の縁起絵が製作されて寺社に所蔵された。中世の縁起絵は、能筆家による染筆と豪華な彩色をともつた絵巻であり、宝物として扱われていた。これが本縁起や広縁起である。

しかし、民衆が本縁起を間近にすることはまれであつた。西国や坂東の三十三所観音霊場巡りは、中世には民衆の間でも盛んになつたが、参詣する民衆にむけて縁起が頒布されることはなかつた。中世には、縁起が説き語られたが、民衆が入手できるものではなかつた。

近世に至り、交通路や宿駅が整備されると、寺社参詣がいつそう盛んになつた。寺社参詣を最も盛んにしたのは巡礼・巡拝である。本尊巡礼では西国三十三観音（国立歴史民俗博物館蔵◎印略縁起）・坂東三十三観音・秩父三十四観音の巡礼や都市での六地藏巡り、聖蹟巡礼では弘法大師の四国八十八箇所遍路、親鸞聖人の弟子二十四輩の寺院、法然上人の遺跡二十五箇所、日蓮聖人の霊跡寺院や洛内法華二十一本山や江戸十大祖師巡りなどの巡拝があつた。また、伊勢参宮では、そこに至る街道沿いの寺社が巡拝された。巡拝を受ける寺社では、参詣者に向けて、本縁起を簡略に書き直した略縁起を刊行した。現存する略縁起では、四国遍路寺院の略縁起はまれであ

るが、法然・親鸞・日蓮の靈跡寺院の略縁起は多い。とくに浄土真宗や日蓮宗の寺院では、宗祖への信仰の高揚によって、小さな寺院でも略縁起が作成された。

寺社参詣のため、明暦四年（一六五六）の『京童』をはじめとして十七世紀中期から十八世紀初期には、京都・奈良・大坂・江戸その他各地で名所記が刊行された。そこには名所たるゆえんとして、寺社の縁起が略述された。名所に神秘性を認めて霊場とするには、その縁起物語や靈験説話が必要だった。出版の時代となった近世初期に名所記が出版され、名所・寺社を参詣する旅人が現われ、寺社縁起への関心が高まっていった。

II-3 一枚刷りの名所記と略縁起

近世の初期には、『京雀』のような冊子の名所記のほかに、一枚刷りの名所記があった。これは現在でも駅や案内所で配布されている観光案内図に相当する。寛文十一年（一六七二）『鞍馬寺道之名所』（奈良県生駒郡斑鳩町『大方家蔵縁起類』所収）は、一枚刷りの名所記である。十七世紀後半からは名所記の時代といえるほど、各地で名所記が出版された。名所記を手にした民衆は、遠い昔から幾星霜を経て今日に伝わったと説く寺社の縁起物語にふれて、寺社への憧れと信仰をいだき、寺社参詣にくり出していった。

一枚刷りの名所記が流行した十七世紀後半には、寺社では一枚刷りの略縁起が出された。年代の明らかな一枚刷りの略縁起として、『和州山辺郡多田 来迎寺善善導大師広縁起の抜書』（延宝八

年（一六八〇）刊 一枚 『大方家蔵縁起類』所収）をとりあげる。広縁起とは長文の縁起で、その抜き書きは短文の略縁起である。この『広縁起の抜き書』は、来迎寺の宝物縁起であり、宝物を開帳した時に出されたものらしい。開帳では、宝物を前にして、半紙一枚に記した短い「読み縁起」を僧が読み上げて宝物の解説をおこなった。『広縁起の抜き書』は読み縁起の体裁となっている。広縁起は、聖教として寺院に秘蔵されて、あまり披見を許されない卷子本であるのに対して、抜き書として縮小化され、刷り物として大量に出版された略縁起は、民衆に広く頒布されて読まれた。霊像との結縁のために頒布された御影札は、霊像の縮小版であり、民衆が自家に持ち帰って霊像と同様の霊力を得た。略縁起も同様であり、寺院で説かれた霊験説話を自家に持ち帰った。

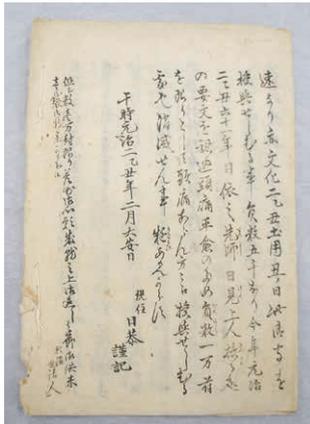
以上のように一枚刷りの略縁起は、本縁起をもととして、読み縁起や名所記とのかかわりから発生したものである。これがやがて長文化してゆくと、綴じ物（仮綴）の冊子の形態の略縁起となつてゆく。

II-4 開帳と略縁起

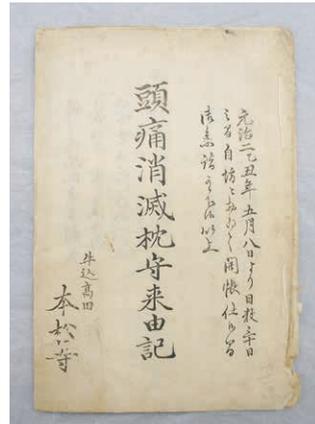
開帳とは、神仏が安置されている厨子の扉をふだんは閉めて拝観できない神仏を、何年かに一度、扉を開いて拝観させ、神仏と民衆との縁を結ばせる祭り行事である。近世の開帳の早い例は、江戸では承応三年（一六五四）に浅草寺で、京都では元禄十五年（一七〇二）大通寺での例があ

る。江戸では幕末までに約一五〇〇回の開帳が行われた。開帳が盛んに行われた十八世紀から十九世紀前半は、略縁起の盛行期でもあった。開帳と縁起との関係は密接であり、開帳を契機として、本縁起を平易化し、振り仮名や絵を入れて読みやすくした略縁起が作られ、刷られて大量生産された。開帳に際して頒布された略縁起には、それを示す刻記があり、現存する略縁起の大半は開帳のための略縁起であった。

国立歴史民俗博物館蔵『諸国縁起由来記』の『頭痛消滅枕守由来記』(H779-6207)は、江戸牛込高田の本松寺の日蓮聖人像を開帳した時に刷り出されたもので、ほうろく加持による頭痛消滅の守りの由来である。表紙には「元治二乙丑年五月八日より、日数三十日之間、自坊ニおゐて開帳仕候間、御参詣可被下候、以上」という開帳広告があり、元治二年(一八六五)に本松寺における居開帳で出された略縁起であった。その冒頭は「抑



『頭痛消滅枕守由来記』(国立歴史民俗博物館蔵)の刊記



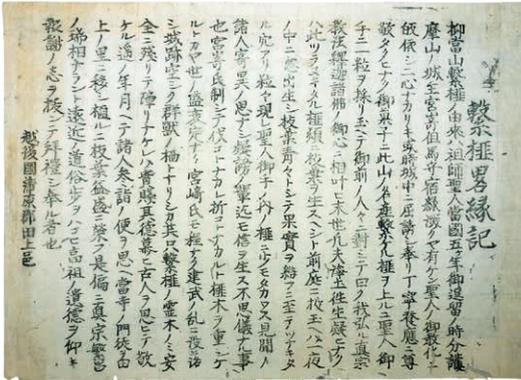
『頭痛消滅枕守由来記』(国立歴史民俗博物館蔵)の表紙

当山に安置し奉る願満高祖大士と称し奉る由来は」で始まり、日蓮聖人（高祖大士）像が頭痛を治してくれる由来を説き、末尾は「頭痛平愈のため員数一万符を限りとして、頭痛あらん方々え授与せしむる処也、消滅する事疑あるへからず」と結ばれている。開帳場では簡潔な縁起・由来の口演が行われたが、それを読み物として文字化したものが略縁起である。これを読むと、開帳場の説教がよみがえってくる。

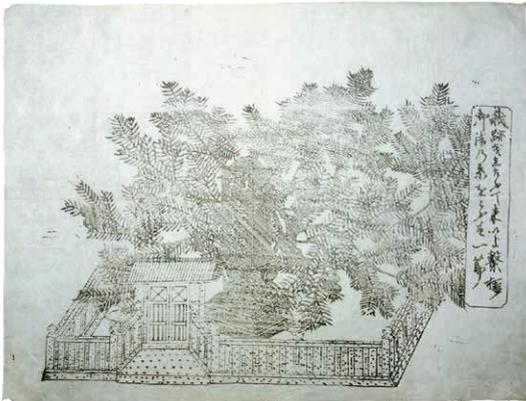
II-5 霊跡寺院と略縁起

民衆は神仏から利益をうけるために霊場である寺社に参詣する。霊場とは神仏や高僧によって霊験が現された聖地であり、その著しさは霊験説話によって説かれ、それを証拠づけるさまざまな霊跡や霊宝が事物（モノ）として示された。近世に民衆の霊場参詣が盛んになると、それまで霊場とされていなかった寺社でも、信仰を広めて参詣者を獲得し収入を得るために、そこが霊場であることを主張する由来としての物語を作りだし、霊宝としてのモノを用意していった。その由来物語が略縁起であり、物語の催し場が開帳であった。中には由来のあやしい開帳も少なくなかった。

江戸における宗派別の開帳で最も多いのは日蓮宗で、日蓮の生涯や法難に関わる霊跡寺院の出開帳が多く、祖師像（木造日蓮像）が開帳本尊とされた。祖師信仰とは、神秘に満ちた生涯であった日蓮の像を祀り、日蓮の霊性によって現世利益がもたらされるとする信仰である。開帳された



〔越後国蒲原郡酒屋町西養寺所領田上村繫樞略縁記〕
(国立歴史民俗博物館蔵)



〔親鸞聖人繫樞御旧跡〕
(国立歴史民俗博物館蔵)

祖師像の略縁起は、日蓮の神秘性が眼前の祖師像に及んでいることを説き、祖師像の霊験と利益を語っている。日蓮が自ら刻み開眼したという自刻自開眼像や、高弟の六老僧が日蓮に面拝して刻んだとする祖師像は、日蓮の霊性を直に伝える霊像とされた。前述の『頭痛消滅枕守来由記』（本松寺）は祖師像の略縁起である。祖師像は、厄除祖師・旅立祖師・開運の祖師・延寿の祖師・子安の祖師・満願の祖師などという現世利益の別称が祖師像に冠されて、霊力が説かれた。

靈跡巡拝が盛んなのは浄土真宗である。親鸞や蓮如の靈跡寺院や親鸞の弟子である二十四輩の寺院を巡拝した。親鸞は配流された越後をはじめとして、下野・常陸など旅して布教したため東国に靈跡寺院が多い。蓮如が旅して布教した北陸・近江に蓮如の遺跡寺院がある。

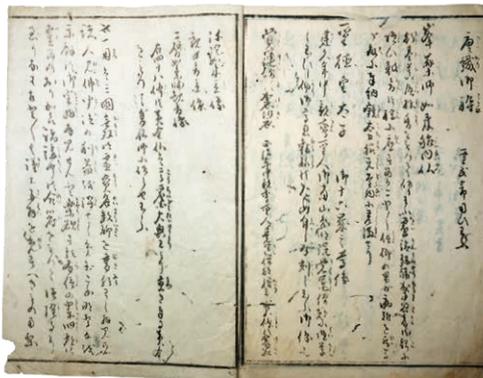
国立歴史民俗博物館が所蔵する『諸国縁起由来記』には、親鸞・蓮如の靈跡・旧跡とする二十九箇寺社の略縁起がある（●印 常陸・下総・信濃・越後・越前・近江・山城）。越後の親鸞関係の 箇寺社の略縁起の中には、親鸞靈跡の越後七不思議とされる、逆さ竹・焼き鮒・八房梅・数珠掛け桜・三度栗・繋ぎ榎・片葉の葦のうちの四つが含まれている。すなわち、繋ぎ榎靈跡は、『越後国蒲原郡田上邑了玄寺繋榎略縁記』（了玄寺）・『越後国蒲原郡酒屋町西養寺所領田上村繋榎略縁記』（了玄寺）・『親鸞上人繋榎御旧跡（図）』（了玄寺）、逆さ竹靈跡は、『祖師聖人御杖倒枝竹略縁記（浄光寺）』、三度栗靈跡は『越後州蒲原郡保田の郷孝順寺靈宝旧跡略縁起（孝順寺）』、焼き鮒靈跡は『焼鮒旧跡略縁起』（山王大権現）である。

Ⅱ-6 略縁起の刊行意図

寺社側では、略縁起の板行と頒布にどのような意図をもたせていたのだろうか。国立歴史民俗博物館蔵『諸国縁起由来記』の『法隆寺略御縁由』（天保十三年）には、「此一冊は、三国無双の靈宝名数聊いさかを書頭いさかわし、拝見の諸人、見仏聞法の利益を得せしむためなり」とあり、開帳された靈仏との結縁の利益を得るために略縁起を頒布したとする。略縁起は本尊と団体で、略縁起によつ

て参詣と同じ功德を授かるとするのである。

参詣者は、旅先で略縁起を授かると、折りたたんで持ち帰つたらしく、縦横の折跡が付けられているものが多い。略縁起は御影や御守と同様に扱われ、家の仏壇や神棚に収めたのであろう。略縁起には振り仮名や挿画が加えられて読み易くされていたので、土産話として読み聞かせることができた。略縁起は近世という出版の時代の文学と関わりながら、大量に刷り頒げられることによって、かなり広く読まれ、民衆に受け入れられていった。また、寺社参詣を好んだ識者は、手許に集まった「略縁起」を合冊し、「縁起集」として保存した。まさに略縁起は、民衆を神仏に結縁させて広く諸人に知らしめ、利益とならしめた刷り物である。



『法隆寺略御縁由』（国立歴史民俗博物館蔵）の巻末



『法隆寺略御縁由』（国立歴史民俗博物館蔵）の巻頭

II-7 流動するマスメディアとしての略縁起

略縁起が本縁起を縮小しただけであるならば、その価値はあまり高くない。しかし、寺社への信仰を広め参詣者を獲得するのを目的にして、新たに靈験を強調して書かれた説話であるのが略縁起である。略縁起は、時代や社会の変化に応じてゆく寺社縁起の流動態であり、物語によって信仰にみちびく唱導文学が略縁起という形態で大量生産されて、寺社と民衆を媒介するマスメディアであった。ここに本縁起を超えた価値がある。そこには、潜在していたさまざまな寺社の伝承が記録されている。また、新たに考案された靈験譚には、信仰の内容と実態があらわれている。

略縁起は、近世の出版時代の文学と同様に、それを要求する人々の手許に運ばれて読まれた。縁起を主張する寺社と現世利益を要求して縁起を受け入れた民衆との間に略縁起が存在する。その説話が民衆の間に定着すると、寺社伝説となつて民間に伝承された。都市での寺社伝説の伝播には略縁起の流布が影響していた。文化十一年（一八一四）『甲斐国志』、天保五年（一八三四）『江戸名所図会』、天保十一年『新編相模国風土記稿』などの地誌は、略縁起に取材して記述されており、近世後期の地誌類の寺社記事は略縁起に依拠するところが多かった。略縁起は収集されて「略縁起集」として綴じて保存された。国立歴史民俗博物館蔵『諸国縁起由来記』の略縁起のうち、★印を付した八点は、現在では単冊となっているが、これらには同じ綴じ跡があり、個別に収集して合冊して「略縁起集」としていたことがうかがえる。「略縁起集」は寺社資料集としてとても有益である。

略縁起は寺社の本源と変遷を語り、現在の民衆に過去の事蹟や靈験を結びつけるといふ近世の人々の歴史認識でもあった。略縁起の作中で年代・地名・寺社名・人名等が特定されて物語が展開すると、いっそう荒唐無稽さが目立つたため、近代には略縁起をかえりみなくなつた。そのため、文字資料でありながら歴史学や古典文学からは遠ざけられてきたのである。

しかし、近世におびただしく展開した略縁起は、寺社経営の社会的機能を直接的に担いながら、民衆の手中に至って受容された縁起説話であり、これによって近世に高揚した寺社信仰の具体的な言説が知られる。また、当時のさまざまな信仰対象とその利益をはじめ、在地の伝承や伝説を記した民間の地誌資料、伝説資料、伝承資料として、多くの情報を提供してくれる。さらに、略縁起は、中世・近世の由来書・由緒書・祭文・偽文書の類型として、民衆の信仰観と歴史認識を知る手がかりとなるだろう。

(久野俊彦)

◇略縁起に関するおもな参考文献

- 矢代和夫・宮本瑞夫・志村有弘編『略縁起集』宮本記念財団、一九九〇年
- 中野猛編『略縁起集成』一～六、勉誠社、一九九五～二〇〇二年
- 中野猛編『説話と伝承と略縁起』新典社、一九九六年
- 略縁起研究会編『略縁起 資料と研究』1～3、勉誠社、一九九六～二〇〇一年
- 篠瀬一雄編『社寺縁起の研究』勉誠社、一九九八年
- 稲垣泰一編『社寺略縁起類聚』1、勉誠社、一九九八年
- 堤邦彦・徳田和夫編『社寺縁起の文化学』森話社、二〇〇五年
- 石橋義秀・菊池政和編『近世略縁起論考』和泉書院、二〇〇七年
- 久野俊彦『縁起と絵解きのフォークロア』森話社、二〇〇九年
- 堤邦彦・徳田和夫編『遊楽と信仰の文化学』森話社、二〇一〇年
- 中野猛（山崎裕人・久野俊彦編）『略縁起集の世界―論考と全目録―』森話社、二〇一二年
- 久野俊彦「歴史の証人『諸国縁起由来記』―略縁起に見る寺社めぐり―」『歴博』第二二四号、
（財）歴史民俗博物館振興会、二〇一九年

おわりに

本冊子は、国立歴史民俗博物館第四展示室で開催された特集展示「お化け暦と略縁起―くらのなかの文字文化―」（二〇一八年四月二四日～一〇月二八日）の後半部分をその後の調査研究の成果をふまえて発展させたものである。さらに第Ⅱ部では国立歴史民俗博物館が所蔵している略縁起コレクション「諸国縁起由来記」全体を検討し、略縁起という資料の可能性について述べてみた。

略縁起は近世の寺社が、その由来や関連する宝物類に関する説話、伝承を簡便なかたちで記し、印刷刊行したものである。当然のことながら地域における歴史や文化に関する情報がそこには表現されており、さまざまな立場からの利用が可能である。ここではそうした歴史文化研究のアクセスポイントとしての略縁起を、これまで注目されてきた文学研究の視点に加えて、歴史や民俗、宗教および信仰などの研究資料としても活用できることを述べてみた。本冊子を通して略縁起が、ちいさいながらも歴史文化研究のよりどころとなる優れた資料群であることが御理解いただけると思う。

また近世に生まれた略縁起というメディアが近代に入って少しずつかたちを変えて現在につながっているという点も、歴史文化研究拠点の変遷の問題として、とらえることができるだろう。本書を手に取りられた方が略縁起に興味を持っていただき、そこに記されている情報を出発点に

して、地域の歴史や文化を考えていく作業に参加していただけるのであれば、これに過ぎる喜びはない。

本書の構想は、特集展示の内容がその終了とともに失われてしまうのを惜しんで、何か次のステップに引き継げるものを残した方がいいのではないかと大島建彦先生（東洋大学名誉教授）に御提言いただいたことが出発点であった。巻末ながらあらためて大島先生の御鞭撻に御礼申し上げたい。あわせて長年の調査研究の成果である略縁起のコレクションを全面的に利用させていただいた中野猛先生（都留文科大名誉教授）、吉田家資料について御協力いただいた水野道子氏（西郊民俗談話会会員）、調査に際して細やかで効果的な御助言をくださった加藤紫識氏（和洋女子大学特任教授）にも明記して、御礼申し上げます。

二〇一九年二月二八日

執筆者プロフィール

久野 俊彦 (ひさの としひこ)

所 属 東洋大学（非常勤講師）

専門分野 民俗学、説話文学

著 作 『絵解きと縁起のフォークロア』（森話社、2008年）
『日本の霊山読み解き辞典』（共編、柏書房、2014年）ほか。

小池 淳一 (こいけ じゅんいち)

所 属 国立歴史民俗博物館

専門分野 民俗学、信仰史

著 作 『陰陽道の歴史民俗学的研究』（角川学芸出版、2011年）
『季節のなかの神々―歳時民俗考―』（春秋社、2015年）ほか。

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」／「地域における歴史文化研究拠点の構築」ユニット活動成果報告集

略縁起への招待

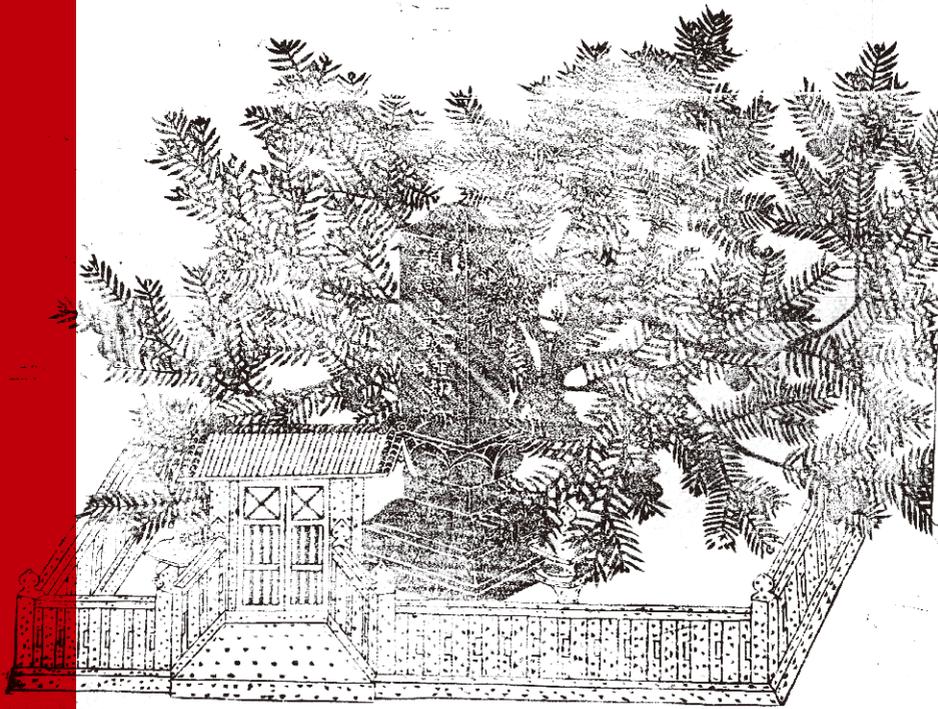
発行日／2019年3月20日

著者／久野俊彦・小池淳一

発行／人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

印刷／株式会社 弘文社



栽
跡
乃
系
在
之
東
上
繫
極
第
一